

## 契約労働者からインド・モーリシャンへ

——イギリス議会文書・植民地報告(1862-1882)にみるモーリシャスのインド系移民——

杉 本 星 子

### はじめに

近代化の過程で、様々な要因によって世界規模の人口移動が生じた。そうした人口移動の結果、各地に多様なエスニック・グループが形成された。オーバーシーズ・インディアンズ（海外在住インド人）と総称されるインド系移民も、その一つである。

インド系移民は、今日、世界に広がっている。ひとくちにインド系移民といっても、その生活や構成、受け入れ社会における位置づけはさまざまである。彼らが政治的、経済的に大きな力を握っている地域も多い。また、近年、世界各地のインド系移民のあいだに、伝統的なインド文化への回帰志向が高まっている。それをとおして彼らのあいだに新たな国際的ネットワークも形成されつつある。グローバル化が進行する現在、インド系移民の国際的ネットワークは、華僑ネットワークとともに改めて注目されている。

一般にエスニック・グループとは、国民国家の枠の中で、他の同様の集団との相互行為的状況下に、出自と文化を共有する人々の集団と定義される（綾部，1985，p. 9）。ただしそれは実体的な集団というより、行為者自身の帰属意識とアイデンティフィケーションによるカテゴリーである（Barth, 1969, pp.13-14）。当該社会の社会的、歴史的コンテクストのなかでインド系移民としてのエスニック・バウンダリーそのものが形成され、インド系移民の在り

ようや社会的位置づけ、インド系移民としてのエスニック・グループの特質が創り出されている。

本稿では、モーリシャスのインド系移民の定着期である1870年代から1880年代に焦点をあて、歴代モーリシャス総督が本国議会に送った年次報告「イギリス議会文書・植民地報告」（1862-1882）を資料として、インド・モーリシャンというエスニック・グループが形成される時期におけるインド系移民の社会状況と、政府によるインド系移民のカテゴリー化について考えてみたい。これは、イギリス官吏という「他者」の視線をとおして編集された資料に基づくインド系エスニック・グループ生成期の検証である。

なお、インド系移民側の視線をとおしてみたエスニック・グループのバウンダリー規定とエスニック・イメージの形成については、後日、1880年代以降の政治運動を中心に、インド・モーリシャンのエスニック・アイデンティティー形成史として稿を改めて検討することにしたい。

### 1. モーリシャスのインド系移民概説

モーリシャスはインド洋南西部、マダガスカル島の東約900キロに位置する面積2045平方キロメートルほどの小さな島嶼国家である。

人口は約109万人（1990年現在）で、インド・モーリシャン（インド系モーリシャス人）約72万5千人（65.5%）、シノ・モ

ーリシャン（中国系モーリシャス人）約2万5千人（2.3%）、ジェネラル・ポピュレーション（アフリカ系・クレオール・ヨーロッパ系モーリシャス人）約34万人（31.2%）から構成されている。政府は諸民族の融合による理想的な多文化社会建設への道を模索している。

モーリシャスの経済は製糖産業に依存している。サトウキビ畑は、島の耕地面積の約90%を占める。総人口の約三分の二を占めるインド・モーリシャンの多くは、19世紀にサトウキビ・プランテーションの労働力としてインド各地から徴募された契約労働者の子孫である。

インド・モーリシャンとして一括りにされている人々の内部も一様ではない。インド・モーリシャンのうち約58万人がヒンドゥー教徒、残りの約17万5千人がイスラム教徒である。ヒンドゥー教徒はさらに、サナタ・ダルマ寺院連盟、アーリヤ・サマージなど、さまざまな宗教団体に分かれている。また、ヒンディー、タミル、マラーティといった言語集団ごとの寺院があり、そうした寺院を統括する宗教団体も結成されている。イスラム教徒も同様に、さまざまな宗派に分かれて宗教団体を結成し、それぞれのモスクをもっている<sup>1)</sup>。

こうしたインド・モーリシャン内部の複雑な分化は、国勢調査報告にも読みとることができる。モーリシャン（モーリシャス人）としての国民的統合をスローガンに掲げた左派政党MMM（モーリシャス闘争運動）政権の下でおこなわれた1983年の国勢調査以後、民族帰属を問うことによって民族アイデンティティーが助長されることを懸念して、民族名を問う項目が廃止された。しかし、1991年の宗教別人口統計をみると、相当数の国民が自らの宗教名として、クリスチャン・タミル、アーリヤ・サマジスト・ヒンディー、アーリヤ・サマジスト・グジャラーティというように宗教や宗派と言語集団名を組み合わせたり、マラーティー、

ボージュブリー、テルグといった言語集団名や、ヴァイシャ、ラージプートといったカースト名などをあげている（Mautou, 1996, pp.329-330）。

このような宗教と出自と言語が複雑に絡みあうインド・モーリシャン特有のアイデンティティーの在りようは、19世紀末のインド・モーリシャンというエスニック・グループ生成期の社会状況にその起源を見いだすことができよう。

19世紀、島を統治していたのはイギリス本国から派遣されたイギリス人官吏であり、サトウキビ・プランテーションを所有する有力プランターはフランス統治時代に入植したフランス系移民であった。奴隷制の廃止後、アフリカ系の労働者のほとんどはプランテーションを離れ、代わって導入された契約労働者のほとんどはインド政庁の臣民であるインド系移民であった。イギリス人官吏は島では少数派であり、有力者であるフランス系のプランターの支持なしに島の円滑な統治はできない。さらに契約労働者の導入に当たって、モーリシャス政庁は、インド政庁や、製糖産業の競争相手である西インド諸島プランターのロビーを含む本国議会の思惑をも無視することができない立場にあった。モーリシャス政庁のインド系移民の導入・定着政策は、こうした多民族の共存と複雑な政治状況の中で進められた。

## 2. インド系移民の導入と定着

モーリシャスのインド系移民史は、以下のように大きく時代区分できる<sup>2)</sup>。

- 1) ヨーロッパ人の島発見からフランス統治期（1513年～1809年）
- 2) イギリス統治の開始から奴隷解放にともなう契約労働者導入決定期（1810年～1841年）
- 3) 契約労働者導入期（1842年～1879

年)

- 4) 自作農の増加と政治活動の開始期  
(1880年～1923年)
- 5) 選挙権の拡大と独立運動期 (1924年  
～1967年)
- 6) 独立後 (1968～現在)

本稿で検討する1860年代から70年代は、契約労働者導入期の後半にあたる。島の経済に移民労働者が不可欠な存在となり、労働者の定住を促す法案が次々と制定されていった時期である。またそれは、1880年の法律を契機に土地の払い下げが奨励されてインド系移民が自作農化し、選挙権を求めて政治運動を開始する直前の時期でもある。

以下に、モーリシャスにおけるインド系移民人口の推移、1860年代から70年代のインド系移民の到着数と出航数、1860年代から70年代の総人口に占めるインド系住民の比率を示す(表1、表2、表3参照)。

### (1) 前史(1860年まで)

モーリシャス島は長く無人島であったが、古くからインド人水夫やアラブ商人の間にディナロビン島の名で知られていた。1513年、ポルトガルの海軍提督が島を「発見」し、ヨーロッパ船舶の食料と水の供給地として利用されるようになった。1598年にオランダが島の占領を宣言し、マウリティウスと命名した。その後、入植が試みられたが、ケープ基地の建設や海賊の横行による入植地の荒廃などを理由に、オランダ東インド会社は1706年に島の放棄を決定した。次いで1715年、フランスが島を占領しフランス島と名付けた。フランス人プランターは、フランス東インド会社を介して島にアフリカ奴隷を導入し、サトウキビ生産を軌道に乗せた。すでにこの当時、インド商人が往来し、インド人奴隷や熟練労働者、小間使いなどの家内労働者もいた。インド人の多くは自由民労働者であり、島の商業は南インド出身のタミル商人に握られていた。

表1 モーリシャスのインド系移民人口

	インド系	G・P	中国系	総計	インド系移民比率(%)
1846	56,245	102,217	—	158,462	35.5
1851	77,996	102,827	—	180,823	43.1
1861	192,634	115,864	—	310,050	62.1
1871	216,258	97,497	1,552	316,042	68.4
1881	248,993	107,323	2,287	359,874	69.2
1891	255,920	111,517	3,558	370,588	69.1
1901	259,086	108,422	3,151	371,023	69.8
1911	257,697	107,432	3,515	368,791	69.9
1921	265,524	104,216	3,662	376,485	70.5
1931	268,649	115,666	6,745	393,238	68.3
1941	265,247	143,056	8,923	419,185	63.3
1952	335,327	148,238	10,882	501,415	66.9
1962	454,909	203,652	17,850	681,619	66.7
1972	565,248	236,862	23,058	826,199	68.4
1983	—	—	24,084	966,863	—

G・P ジェネラル・ポピュレーション  
(Mauritius Censusの人口統計より)

表2 インド系移民の到着と帰国

	到着人口			帰国人口		
	男	女	合計	男	女	合計
1861	8,623	2,958	11,581	1,222	1,334	1,556
1862	7,440	2,453	9,893	1,752	460	2,212
1863	3,667	1,587	5,254	2,553	667	3,220
1864	5,626	1,926	7,582	2,692	721	3,413
1865	14,910	5,373	20,284	2,854	667	3,621
1866	3,702	1,894	5,596	2,925	860	3,815
1867	317	33	350	2,571	827	3,398
1868	1,968	648	2,616	1,880	664	2,544
1869	1,182	590	1,772	1,684	636	2,320
1870	2,831	1,245	4,076	2,172	670	2,842
1871	2,318	974	3,292	2,369	705	3,074
1872	4,015	1,759	5,774	2,788	1,031	3,819
1873	5,226	2,388	7,614	2,160	875	3,035
1874	4,818	2,234	7,052	2,874	1,201	4,075
1875	1,996	923	2,919	2,368	1,055	3,423
1876	330	172	502	2,354	917	3,271
1877	1,528	659	2,187	1,794	623	2,417
1878	3,203	1,623	4,826	1,835	527	2,362
1879	2,013	1,066	3,079	1,926	629	2,555
1880	381	213	584	1,180	371	1,551

(各年次のColonial Reportsの統計数字を集計、以下3～6表も同じ)

1810年、ナポレオン戦争の結果、島はイギリスへ譲渡され、モーリシャスと改名された。やがて、イギリス本国で奴隷制反対

表3 インド系移民人口比率

	インド系移民人口				総人口	インド系移民比率(%)
	男	女	合計	女性比率		
1861	141,615	51,019	192,634	26.5	310,050	62.1
1862	148,054	54,711	202,765	27	323,782	62.6
1863	149,942	57,726	207,668	27.8	329,391	63
1864	147,691	59,905	207,596	28.9	333,425	62.3
1865	147,561	62,150	209,711	29.6	338,650	61.9
1866	157,175	67,859	225,034	30.2	356,666	63.1
1867	155,589	70,054	225,643	31.1	360,378	62.6
1868	139,438	65,560	204,998	32	326,955	62.7
1869	138,883	64,888	206,771	31.4	322,924	64
1870	140,283	70,353	210,636	33.4	328,633	64.1
1871	142,101	75,641	217,742	34.7	316,042	68.5
1872	144,344	78,128	222,472	35.1	326,454	68.9
1873	147,172	80,852	228,024	35.5	331,782	68.7
1874	150,008	83,309	233,317	35.7	339,371	68.7
1875	150,896	85,439	236,335	36.2	344,692	68.6
1876	149,460	86,629	236,089	36.7	345,955	68.2
1877	149,287	88,181	237,468	37.1	348,625	68.1
1878	151,040	90,853	241,894	37.6	354,729	68.2
1879	150,857	92,529	243,386	38	357,339	68.1

運動の圧力が強まった。奴隷解放を必至とみたプランターはインドの労働市場に目を付け、1834年、最初のインド人契約労働者が導入された。1835年、奴隷解放令が施行された。解放された奴隷はその後4年間、元の雇用主のもとで年期奉公を行うことが義務づけられていた。1839年に年期奉公制が廃止されると、解放奴隷のほとんどはプランテーションを離れて町や未開墾地に移り住み、職人や漁師となったり、市場作物の栽培や炭焼きに従事したりするようになった。一方、1837年には、インド人契約労働者に帰国費用が保証される場合、5年までの長期契約が許可されることになった。しかし、イギリス本国で、インド人契約労働者に対する航海中の劣悪な待遇やプランテーションでの奴隷同様の扱いが問題となり、インドから調査団が派遣された。1839年、インド政庁は、モーリシャスにおける劣悪な労働状況を理由に、カルカッタからの労働者の移送を差し止めた。

1842年、モーリシャス政庁の監視の下で、インドからの労働者の移送が再開された。

この年新たに制定された移民法によって、契約期間が1年に短縮されるとともに、労働者に5年後の無料帰国権が認められた。契約条件には、毎月定められた給与の支給のほか、6ヶ月の給与前払い、雇用者負担による帰国費用の保証、住居の供給、米、塩、油などの食料や衣料の配布などが規定されていた。しかし、実際の労働状況は過酷なものであった。モーリシャス政庁が任命するエージェントが労働者の徴募を行う派遣制度が導入され、インド政庁には移民を保護する監視官の任命権が与えられていた。しかし、実際には、モーリシャス政庁の指名に基づいて監視官が任命され、モーリシャス政庁とプランターの癒着によって、プランターの監視はほとんどなされなかったのである。

1846年には、インド系移民が総人口の3分の1に達した。1847年には、1日仕事を休むと2日分の給与が差し引かれるダブル・カット法と非契約労働者への課税、契約を終えた労働者に対するチケット（居住登録証明）の携帯が定められた。1849年には、契約期間が3年に延長された。1851年には（雇用主への）帰国旅費の積み立ての強制が解かれ、移民の定住が奨励されるようになった。1853年には無料帰国制度が廃止され、移民の定住を促進するために、妻子を伴う労働者を受け入れるプランターに対して助成金が交付されるようになった。この助成金制度は1865年まで続いた。

1856年、それまでカルカッタに限定されていた労働者の徴募が他の港にも広げられ、マドラスやボンベイからも労働者が移送されるようになった。1858年にはプランターによる直接徴募が認められるようになった。移民の導入は、1858年から59年にかけてピークをむかえた。

## （2）スティーブンソン総督時代（1857－1863）

1857年5月に、ジャマイカのプランターの家に生まれたスティーブンソン卿が、モ

ーリシャス総督に着任した。彼は鉄道の敷設を開始し、新港湾建設のための調査委員会を設置した他、移民の衛生施設を改善し検疫体制を強化するなど、積極的な政策を行った。

スティープンソンは、契約期間を終えた労働者をサルダール（徴募人）として派遣することに積極的な姿勢を示した。先に述べた派遣制度により、初期の契約労働者は政庁が任命する徴募人がインドで徴募し、到着した労働者を政庁がプランターに配分するシステムをとっていた。そのため、プランテーションには出身地も母語もカーストも異なる人々が集まった。しかし、サルダールによる徴募が始まると、親族や同郷の人々が同じプランテーションに雇用されるようになった。

到着する労働者に対する帰国者の割合は、1861年には16.14%にまで低下し、インド系移民人口が、総人口の三分の一を占めるに至った。しかし、1861年の砂糖の不作とハリケーンによる大被害、続く1862年の砂糖価格の大暴落によって、モーリシャス経済は大打撃を受けた。1862年、3年の契約期間を終えた労働者に再契約をする者が多いという理由をもって、契約期間が5年に延長された。ただし、女性の契約期間は1年である。また、非合法に仕事を休んだ者には刑罰が科されるようになった。

### （3）パークレイ総督時代（1864－1871）

1863年7月のスティープンソンの死後、陸軍少将ジョンストンが総督代行をつとめた。翌1864年11月、ヘンリー・パークレイ卿がモーリシャスに着任した。彼もまた西インド諸島にプランテーションを所有する人物であった。彼はインド人と中国人の労働者の導入に熱心であり、一貫してプランターの利益を優先する政策をとった<sup>3)</sup>。

1864年の凶作に続く1865年の洪水で、モーリシャスの砂糖生産高は減少した。ヨーロッパ市場ではビートによる砂糖生産が増

加し、砂糖価格は低迷した。モーリシャスは農業危機に見舞われ、多くのプランターが破産した。さらに追い打ちをかけるように、1865から66年にかけて、マラリアが猛威をふるった。

1867年、新労働法が制定され、契約期間終了後の移民にパス（職業と住所を明記した写真付き証明書）の携帯を義務づけるパス・システムが施行された。パス・システムは、パスを得るための費用や手続きの煩雑さ、パスの不携帯による逮捕などによって契約期間終了後の労働者を拘束し、再契約を強いるものであった。この年、イギリス本国の議会で、モーリシャスのプランテーション労働者の過酷な労働環境が問題となった。

1868年にハリケーンが上陸し、ポート・ルイス港や鉄道施設は甚大な被害を受けた。1869年にはスエズ運河が開通して南廻りインド洋航路は衰退し、中継貿易で栄えていたポート・ルイス経済は大打撃を受けた。モーリシャス復興のためには、製糖産業の建て直しが急務であった。しかし、労働者の徴募は、西インド諸島やフランス植民地のプランテーション労働者の需要と競合し、いっそう難しくなっていた。1870年代の植民地政庁の年次報告には、しばしば労働者徴募の困難さが訴えられ、1867年の労働法が労働者の徴募競争に不利に働いていると述べられている。

### （4）ゴールデン総督時代（1871－1874）

1871年2月、イギリス本国で国会議員をつとめていたゴールデンがモーリシャス総督に着任した。ゴールデンは、島の役人の腐敗、貧富の差やそれを助長する税制、過酷な労働システムとプランターの不正を嫌悪した。彼は、プランテーションによって破壊された島の自然を回復するために森林の保護や植林を行い、インド人労働者の労働状況の改善を目指して監視制度を強化した。

1872年、プレヴィッツがモーリシャス総督と本国議会に、インド人の契約労働者の待遇改善をもとめる請願書を提出した。プレヴィッツの請願書には、9000人のインド人契約労働者の署名が添えられている。文字を書けない労働者は名前の代わりに記号をしたためた。この署名が、インド人の権利獲得闘争の出発点となった。

同じ1872年、ロイヤル・コミッションが契約労働の実態調査を開始した。さらにポリス・コミッション、ペンローズ・ジュリアン・コミッションなどによる調査も行われた。ロイヤル・コミッションの調査結果は、1875年に議会に報告された。内容は厳しく、移民の労働状況の改善が勧告された。ロイヤル・コミッションは数々の提言をおこなったが、プランターの圧力団体である農業会議所は頑強に抵抗し、改革はなかなか進まなかった。

### (5) アーサー・ファイル総督時代 (1874-1879)

ゴールドエンの離任後、プランターに好意的なエドワード・ニュートンが総督を代行した。1874年11月に、ベンガルの軍隊で監査経験を積んだ後ビルマで高等弁務官をつとめたアーサー・ファイル卿が、モーリシャス総督に任命された。彼は温厚かつ公正で威厳のある人柄により、人望が厚かった。

アーサー・ファイル総督は労働法の改正に尽力し、1878年に新労働法が施行された。改正された労働法には、パス・システムの廃止、給与滞納の禁止、日曜・祝日の休日厳守、ダブル・カット法の廃止、インドへの帰国の自由化、プランテーション内の病院と住宅の整備、プランターの経営する店での商品購入の強制廃止などが明記された。

### (6) 1880年代

1880年を境に、インド人契約労働者の移入は断続的になった。この年、労働者への耕地の分割譲渡が開始された。荒れ地が払い下げられ、開墾に必要な資本と地権が5

年の分割払いで貸与された。払い下げ地で生産されたサトウキビは、元の地主が所有する製糖工場に集められ精製された。土地の払い下げは、プランターにとって、未開墾地の処分と労働者の確保という一挙両得の策であった。労働者にとっても、自分の土地をもてるということは大きな魅力であった。インド系移民の多くは、こうしてプランテーション労働者から小自作農へと移行した。1910年までに、インド系移民とその子孫が所有する土地は総計4万7888エーカーに上った。これは全島の耕作可能面積の45.9%、サトウキビ耕地の3分の1にあたる (Varma, 1980, pp.169-170)。

## 3. 年次報告における住民分類とインド系移民

モーリシャス政庁の年次報告の記載事項は、不統一である。本稿で対象とする年代の報告に限っても、項目、順序、説明は年次によって異なり、ページ数も10ページから76ページまで様々である。

1865年の報告書を例にあげると、所見、税收、歳入と歳出、軍事費、市政、公共事業、鉄道、輸出入、船舶、移民、人口、宗教、教育、貯蓄、福祉事業、監獄、犯罪、立法、属領、備考という項目立てがなされている。インド系移民についての記述は、主に人口、立法、移民、宗教、教育、犯罪の項目に見いだされる。

この章では、1860年代から70年代の年次報告の移民、人口、教育等の統計や記述から、モーリシャス政庁によるインド系移民のカテゴリー化について考察したい。

エスニック・バウンダリーは、移民を受け入れた社会における移民とホスト社会との相互行為的状況下に形成される。移民関連法案や統計調査などをとおした行政府による住民のカテゴリー化は、エスニック・グループのバウンダリー規定に大きな意味をもつものと考えられる。

### (1) 移民・外国人・ジェネラル・ポピュレーション

1861年の報告の人口統計は、モーリシャスの住民を、移民、外国人、ジェネラル・ポピュレーションの3つに分類している。移民とは、「インド人」として登録法の適用を受けている者を指す。そこには契約労働者のみならず、サーバントとして呼び寄せられた家内労働者や私費渡航者も含まれる。一方、中国系の移民は外国人として扱われている。この報告のジェネラル・ポピュレーションは、移民と外国人以外のモーリシャス住民を包括するカテゴリーである。

1861年の報告者であるスティーブンソンは、インド人にチケット（居住登録証明）の携帯といった特別な義務を負わせることによって、彼らを他の住民と区別する必要はなく、むしろ彼らをチケット不携帯による呼び出しや詰問に応じる義務から解放すべきだとして、当時の移民保護官の政策に反対している。さらに彼は、「インド人に対する特殊な法令は契約期間中のみ雇用者と非雇用者相互の保護と利益のために適応されるが、契約期間終了後はインド人も他のクラスの人々と同等に扱うべきであり、少数の逃亡者を監視するために全インド人の自由な移動を禁じる必要はない」と主張した（M. C. R., 1862, pp.112-114）。

このようにスティーブンソンは、契約労働者を職種に基づいた「クラス（階級）」として規定すべきだという立場にたっていた。しかし、次の総督パークレイの立場は違った。

1870年のパークレイの年次報告では、人口統計の補足として、「インド人」はさらに1) 自由渡航者として来島したインド人、2) インディアン・クレオール、3) 契約労働者として来島したインド人という3つのクラスに分けられると述べられ、現在1) の自由渡航者と2) のインディアン・クレオールは身分証明のためのチケット・パス提示法の適応から除外されているが、

1) と2) のなかでも労働者クラスは3) の契約労働者と同じ扱いをすべきだと、法の改正を提案している。

このパークレイの見解が明らかにするように、1870年の人口統計の「インド人」は、人種カテゴリーである。さらにパークレイの提案のうちに、契約労働者の対象を出来るだけ多くのインド人に拡大し、インド人と契約労働者を同一視しようとする姿勢を読みとることができる。

### (2) インディアン・クレオール

ところで1863年の報告では、「アフリカ系住民に対する奴隷解放クラスという区分はもはや好ましくなく、彼らはジェネラル・ポピュレーションに吸収された」と述べられている。他方、インド人については、インディアン・エレメントという名称で特別に括り、それをインド生まれとモーリシャス生まれに分類している（M. C. R., 1863, p.99）。

インディアン・エレメントという言葉が示すように、この年の人口統計は人種的なカテゴリーによって分類されている。また、ここで新たにモーリシャス生まれのインド人という新たなカテゴリーが登場したことは、インド系移民の定着を物語っている。実際、翌1864年の報告では、インド人労働者が定着を始め、数年のうちに、かつての解放奴隷であるクレオール人口を越えるだろうと述べられている（M. C. R., 1864, p. 107）。

1865年以降の人口統計は、モーリシャスの住民をインド人とジェネラル・ポピュレーションに二分している。この二分上問題になるのは、インド人と他の民族との混血者と、モーリシャス生まれのインド人である。彼らはインド人に分類されているが、年次報告では、インディアン・オリジンのネイティブ（1867）、インディアン・クレオール（1870, 1873, 1874, 1880）、インド・モーリシャン（1872）、モーリシャス・

ボーン・インディアン (1878, 1879) など、年によって様々な名称で表記されている。

後に20世紀に入り、モーリシャス生まれのインド人人口がインド系住民の大多数を占めるようになると、インド・モーリシャンという言葉が一般化する。しかし、1860年代から70年代の段階では、この言葉はまだあまり使われていない。最も多用されているのは、インディアン・クレオールという言葉である。このインディアン・クレオールという言葉に、モーリシャス生まれのインド人に他民族との混血が多かったことがうかがわれる。実際、当時のインド系移民の婚姻統計は、インター・カースト婚やインター・レイス婚が多いことを示している。それはインド系移民人口に占める女性人口比率の低さと無関係ではないと考えられる (Carter, 1995, pp. 258-266)。ちなみに、今日、モーリシャスのインド系移民は、異民族や異カーストとの混血を好まない。そして、そうした婚姻慣習こそ、インド系移民の閉鎖的な特徴をあらわすものとして、他の人びとから非難されている。

### (3) 宗教別統計とインド系移民

1860年代の報告には、インド系移民やモーリシャス生まれのインド系住民にキリスト教を布教することに対する反対意見がしばしば述べられている。

「移民の間ではカーストが崩壊し信仰心も揺れている。キリスト教の布教によって彼らの子供たちが教義を知らずに育つと不道德や犯罪にはしりやすい」というのが、反対理由である (M. C. R., 1866, p.142)。このように政庁の宗教政策のうちに、インド系移民を非キリスト教として位置づけようとする姿勢が見られることは興味深い。

一方、1875年の報告には、「インディアン・クレオールは、クレオール (ヨーロッパ系人種とアフリカ系人種との混血) が独占している熟練労働や工芸品交易に向かう可能性もある。しかし残念ながら現時点で

は、彼らの大半は教育もなく、小商いを志向したり聖職者に憧れたりしているだけである」という記述がある (M. C. R., 1875, pp.146-147)。ここでいう聖職者とはキリスト教の聖職者を意味する。ここに政庁の批判にも関わらず、実際はインディアン・クレオールの間にすでにキリスト教が浸透していことがうかがわれる。

教育に関する統計では、教育に用いる言語が問題になった。1863年の報告では、モーリシャスにおける教育の推進が困難な理由として、多言語、多宗教、クレオールやインド人の家庭およびプランターの教育に対する無関心が指摘され、インド人子弟のための教育施設はほとんど無いと述べられている。その後、5才から13才を対象として公立学校や私立学校が作られ、1865年にはインド人学校だけで30校 (うち公立校20) を数えるまでになった。クレオールの学校では英語とフランス語が教えられたが、インド人学校では英語とインドの言語いずれか一つが教えられた (M. C. R., 1873, p. 68)。

1871年から1875年の教育統計は、インド人生徒数を、ヒンドゥーとムスリムに分けている<sup>註4)</sup>。その場合、クリスチャンのインド人子弟やインディアン・クレオールは、ジェネラル・ポピュレーションに含まれている。このことから、1870年代の教育行政では、インド系住民内部の宗教による違いが考慮された結果、クリスチャンのインド系移民がいわゆる「インド人」のカテゴリーから排除され、ジェネラル・ポピュレーションというカテゴリーがキリスト教やフランス語と結びついたカテゴリーとして扱われていることがわかる。

### 4 年次報告にみるインド人問題

犯罪統計は、人種別に集計され、統計に添えられた所見には「インド人の犯罪」や「インド人問題」という表現がよく見られ



る。年次報告では、犯罪者や収監者数に占めるインド人比率がつねに問題とされ、また人種によって犯罪内容に偏りがあると述べられている。

この章では、初めに当時のインド系契約労働者が置かれた状況を示す労働法違反訴訟問題を概観してから、インド人に特徴的な犯罪としてあげられている殺人と放火、強盗、そして毒の使用、自殺に関する報告書の記述をとおして、インド人問題について考察したい。

### (1) 労働法違反訴訟

1860年代から70年代にかけての報告書の全てに、労働法違反に関する訴訟の統計資料が添付されているわけではない。年によっては統計が無く所見のみにとどまっている。しかしその限られた資料からも、当時のプランテーション労働者の厳しい労働状況を読みとることができる(表4参照)。

雇用者側からの訴えと被雇用者からの訴えは、ほぼ平行して増減している。訴訟数は、プランターに好意的なスティーブソン総督とバークレイ総督の統治期に多い。訴訟数のピークは、1867年の新労働法制定直後の1868年である。ゴールデン総督時代には訴訟数自体が少ない。ファイル総督の時代に訴訟数は再び上昇するが、1876年の労働法の改正後、激減する。

被雇用者が雇用者を訴えた理由では、一貫して給与の不払いが群を抜いて多い。1861年と62年に雇用者が被雇用者を訴えた理由の第1は不当休暇であり、第2は逃亡であるが、1863年以降順位は逆転する。これは労働状況の劣悪化を示している。

第2章で触れたように、1870年代に入るとモーリシャスのプランテーションにおける労働者への過酷な扱いが本国で問題となった。労働条件の改善を求める運動はインド人プランテーション労働者の権利意識を高め、それまでプランテーションごとに分断されて統一性を持たなかったインド系移

民のあいだに、対白人プランター意識に支えられた一体感をもたらした。1875年には、労働者のストライキを示す労働拒否が訴訟理由の第1位となっている。こうした労働者の抵抗運動が労働法の改正を促すとともに、1880年代以降のインド系移民の政治運動へと繋がっていった。

表4 労働法訴訟有罪数

	労働者	プランター
1863	14,303	6,164
1864	13,121	5,200
1865	9,912	5,037
1868	14,875	7,733
1869	8,152	3,936
1870	4,954	2,507
1871	3,395	1,578
1873	4,073	1,623
1874	4,473	1,979
1875	4,752	1,794
1876	5,873	4,527
1877	3,934	879
1878	3,324	770
1879	2,614	440

### (2) 犯罪の人種別統計

犯罪統計における人種分類は、インド人、アフリカ人(アフリカ系クレオール)、中国人、アラブ人、白人(ヨーロッパ人)、フランス・イギリス系有色人種(非アフリカ系クレオール)である。

インド人は、さらに、マドラシーズ(マドラス人)、ボンベイズ(ボンベイ人)、ベンガーリーズ(ベンガル人)に分類される。この三区分は移民の出身地に基づくが、同時に大まかにではあるが、タミル語、ヒンディー語、ベンガル語という母語の違いにも対応している。

犯罪数の人種別統計は1868年から70年、74年と75年に報告されている。これをもとに、犯罪者数に占めるインド人割合を計算したのが表5である(表5参照)。

これをみると、確かに1868年から70年のインド人犯罪率は高いが、74年の数字は当時の総人口に占めるインド系移民人口比とほぼ同じであり、75年はそれを下回っている。

ポート・ルイス監獄の収監者の人種別統計は、1865年から66年、1868年から69年、74年から79年の報告に示されている。報告

表5 人種別犯罪統計

	インド系	アフリカ系	クレオール	中国人	アラブ人	ヨーロッパ系	総計	インド系移民比率(%)
1868	117	27	1	1	3	3	152	77.0
1869	76	16	4	1	0	2	101	75.2
1870	73	6	0	1	2	3	85	85.9
1874	75	23	9	2	1	0	110	68.2
1875	58	26	9	1	1	0	95	60.2

表6 収監者数に占めるインド系移民比率

	インド人	クレオール	ヨーロッパ人	中国人	アフリカ人	その他	合計	インド人比率(%)
1865	3,447	904	472	32	87	27	5,144	67.0
1866	3,578	910	578	16	131	10	5,223	65.7
1868	1,524	458	315	37	51	29	2,414	63.1
1869	1,882	530	237	50	93	38	2,830	66.5
1874	7,846	1,263	293	—	—	—	9,402	83.5
1875	9,715	1,496	272	—	—	—	11,483	84.6
1876	2,046	892	240	—	—	—	3,178	64.4
1877	1,558	829	277	28	110	59	2,861	54.5
1878	1,452	975	260	28	112	74	2,901	50.1
1879	1,195	282	228	20	91	538	2,354	50.8

書の数字をもとに、収監者数に占めるインド人割合を計算したのが表6である（表6参照）。74年と75年は80%台で確かに高率である。しかし、60年代のインド人収監率は、総人口に占めるインド系住民人口比よりやや高めであるにすぎず、76年以降はむしろ低い。

### （3）殺人と放火

インド系移民の導入と殺人事件の増加を結びつけて論じた報告は多い。例えば、「これらの増加した犯罪（強盗と殺人）は、おもにインド系住民によって、一般的には同郷の者に対して犯されている。移民は、インドに広くみられる追い剥ぎや強盗のシステムを持ち込む傾向が強く、略奪や復讐の目的で殺人を犯しやすい。復讐による殺人は、多くの場合、女性をめぐる喧嘩から起きている」と述べられている（M. C. R., 1866, p.144）。そして、このように殺人の動機が多く女性問題にあり被害者のほとんどが女性であることは、「半文明化された

インド系住民の女性の野卑な非道徳性の結果であり、彼らの間に存在する女子売買という嘆かわしい慣行と結びついている」と解釈された（M. C. R., 1871, p.63）。

殺人や放火などの事件は、閉鎖的なプランテーション社会のインド系移民間で多発している。背景には、インド系移民における女性比率の低さや、先に示した給与不払い訴訟の多さが暗示する経済的困窮があると考えられる。

また女性問題以外の殺人では、盗みに対するリンチ法の存在が指摘されている。

「一人のインド人が居住区で盗みを働いて捕らえられると、同郷者たちが自らの手で法を行使し、彼を殴打して即決の制裁を加えるのである」（M. C. R., 1871, p.61）。

放火事件の記述にも、同様の移民社会の状況が言及されている。「これらの事件（放火）のほとんど全ては、インド人が同じクラスの喧嘩相手の家に火をつけたものである。喧嘩の理由はふつう女性問題である。（中略）何らかの事故でインド人の家

が燃えると、持ち主は自分と敵対する者が火をつけたと信じ込んだり、自分の復讐心を満足させるために火を利用しようと、同じクラスの別の者の家に再び放火するということが繰り返される」(M. C. R., 1867, pp.145-146)。

このような年次報告の所見から、1870年代にはプランテーションに同郷者集団が形成されていること、インド系移民内部が分裂と抗争の状況にあること、そしてクラス(階層)という報告者の言葉が示すように、プランテーション内に階層分化がみられることなどがわかる。

#### (4) 強盗

押し込み強盗事件の有罪者数のピークは1863年の67件である。街道での強奪事件のピークは1864年から65年にかけてであり、以後年により若干の増減はあるが事件数は急速に減少している。

押し込み強盗事件が一時的に再度増加した1868年の報告には、次のような所見が添えられている。「ヒンドゥスタンのあらゆるところから来た様々な種族や部族の集まる状況下で、より良い秩序を維持することが緊急の課題である。旧移民は、こうした人々からなる。インド人は砂糖プランテーションで5年の年期を終えた後、普通の社会をつくるのではなく、彼らが尊敬するサールダールすなわちチーフ(首領)の下に結束してバンドを作る傾向がある。とくにこうしたバンドのメンバーが出身地や言語を異にする人々からなる場合、たとえ彼らが地主や商店主といった立派な地位にあったとしても、カーストや親族の絆から逃れ、宗教や道徳の義務を気にすることなく、日没後の略奪に加わったり密かに盗品を売りさばにくのを手を貸すことにほとんど良心のとがめを感じないようである。かくして、マドラス人はあちこちでベンガル人の隣人を餌食にし、ベンガル人はさらに弱い隣人に盗みを働く」(M. C. R., 1867-68, p.45)。

また、「かれら(強盗)は主に無宿階層のマドラスのインド人であり、同国人の商店主を襲うのがふつうである」(M. C. R., 1868-9, p.35)、「注目に値するのは、この種の事件でインド人が罪に問われる場合、彼らは一般にマドラス人だということである。これに対して、殺人や故殺、その他の重罪の被告はふつうカルカッタ人である」(M. C. R., 1872, p.123)といった記述もある。

このように、強盗事件はインド人問題として、さらにマドラス出身の、とくに契約終了後のインド系移民の犯罪として取り上げられている。

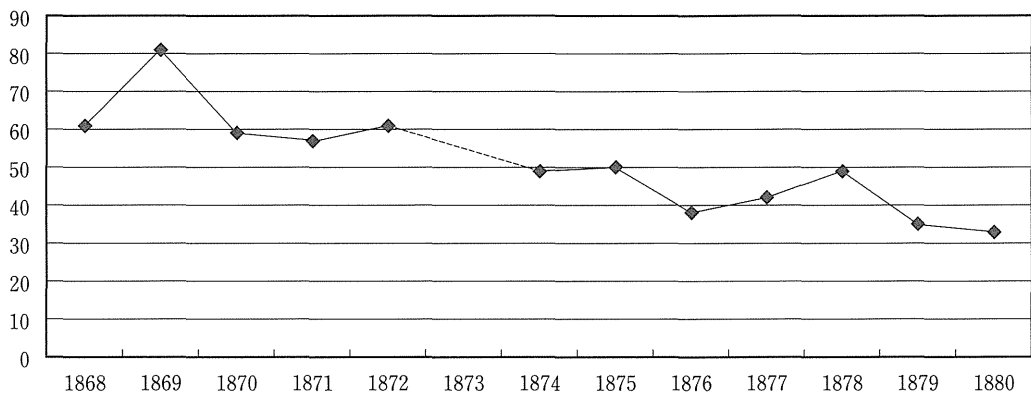
とはいえ、強盗事件の約三分の一はアフリカ系住民が起こしている。強盗事件を特にインド人の犯罪として論ずべき根拠は弱い。インド系移民の増加と定着に加え、過酷な労働環境、とりわけ1860年代の製糖産業の不況と伝染病の流行、1867年の労働法による締め付けの強化などが、旧移民や解放奴隷といった社会的弱者を圧迫し、強盗事件多発状況を生み出したと考えられる。しかし、政府はそれをインド人問題という「人種問題」として捉えることによって、1867年の新労働法による旧移民拘束の正当化に利用した。

#### (5) 毒の使用と自殺

インド系移民の自殺問題に最初に触れているのは、1867年の報告である。それによると、1864年の1年と1865年の10月までの1年10ヶ月に、インド人の自殺が95件あり、そのうち86件が首吊りによる自殺であった(表7参照)。

スティーブンソンは「ほとんどのインド民族は魂の転生を信じている。(中略)身体の一部、とくに頭が切り離されると転生は妨害され、バラバラになった体の部分があの世で百年間お互いを探し求めるという」との理由から、犯罪防止のためにインド人の処刑法として現行の絞首刑に代えて

表7 インド系移民の自殺数



注：1873年のColonial Reportは「減少」とのみ記述。

ギロチンを復活させることを提案した (M. C. R., 1867, p.112, p.145)。これは最高裁判事の同意を得た。こうして、1868年の法令4によってギロチンによる死刑法が制定された。

1869年に自殺者数は81件となり、ピークに達した。1871年の年次報告では、1869インド系移民の自殺率の高さをその民族性に帰している。確かにモーリシャスのインド系移民の自殺率は100万人中280であり、その比率は高い (1871, p.55)。当時のイギリスの自殺率は100万人中65人、モーリシャスのジェネラル・ポピュレーションの自殺率は100万人中67人である。しかし、同じ年のインド本国マドラス管区の自殺率は100万人中54人で、イギリスの自殺率より低いのである。

インド系移民の自殺数は、1879年から80年にかけて減少した。年次報告書では、その理由を1879年の労働法の改正に帰している。とすれば、1869年の自殺者数の多さもまた、1968年の新労働法の制定との関連で考察されてしかるべきであろう。プランター寄りの行政による移民に対する締め付けの強化、とくにダブル・カット法が彼らの生活を圧迫し、帰国や貯蓄の夢を奪い、それが自殺数の増加に反映されたものと考えられる。

1860年代の報告には、自殺と殺人双方に関連して、インド人による毒の使用が指摘されている。特に政府は、1864年から65年にかけて、毒による自殺と他殺が計50件あったことを重くみて調査をおこなった。毒使用者の多くがインド人であり、使用された毒は植物性、とくに朝鮮アサガオの種子が多かった。1871年の報告でも、1869年に確認された13件の服毒死のうち11件がインド系移民で占められていた (M. C. R., 1871, p.54)。確かに年次報告で論じられるように、首吊りや服毒といった自殺方法にインド系移民の民族性がみられる可能性はあろう。しかし、既存の資料だけでは、その議論をするには不十分である。

## 5. インド・モーリシャンと多民族国家モーリシャスの形成

以上、1860年代から70年代の歴代モーリシャス総督が本国議会に送った年次報告のインド系移民に関する記述をみてきた。最後に、年次報告から読みとることができるインド・モーリシャンというインド系エスニック・グループ形成期の状況を整理して、以下の4点を指摘し結びとしたい。

第1に、年次報告に見られるインド系移民の行政府によるカテゴリー化の基準は、

年により、またコンテキストにより異なっている。ただし一般に「インド人」という言葉は、砂糖プランテーションの契約労働者の同義語として用いられている。

とくに70年代以降の人口統計では、明らかに契約労働者は職種やクラス（階層）としてではなく、人種という観点から捉えられている。それは、犯罪に関する記述において一層顕著である。そこではインド人カテゴリーがさらに、マドラス人、ボンベイ人、ベンガラー人という出身地・言語別に細分化されている。

こうしてモーリシャス政庁はプランテーションにおける諸問題を、労働問題としてではなくインド人問題として捉え、その原因をインド系移民の民族性の問題にすりかえることによって政治的責任を回避した。また、このように植民地官吏が社会問題の多くをインド人の民族性という言葉をもって議論したことが、モーリシャスのインド系移民に対するある種のエスニック・イメージの形成に寄与したことも否定できない。この問題は、さらに多くの資料をもって改めて検証する必要がある。

一方、年次報告の端々に、契約労働者以外のインド系移民、たとえばインド人商人やインド人地主などの存在も垣間見られる。実際、モーリシャスには、少数ではあるが契約労働者の導入以前からインド商人や職人、水夫などが来島していた。1880年代の土地の払い下げ以後、インド系移民の政治意識が高まるなかで、彼らとプランテーション労働者が「インド人」意識によって結びつくようになる。本稿で扱った1860年代から70年代の報告書には、まだそうした動向は明らかではない。しかし、モーリシャス政庁が契約労働者を「インド人」という「人種」としてカテゴリー化したことこそが、インド系プランテーション労働者と商人や企業家などの裕福なインド系知識人階層との後年の連携の基盤を作ったといえるかもしれない。

第2に、教育問題の項目では宗教別人口統計が提示されており、このコンテキストにおける「インド人」は、ヒンドゥー教徒やイスラム教徒、すなわち非クリスチャンを指している。こうした宗教と母語の違いを背景として、インド人学校とクレオール学校では異なる言語教育がなされた。このように、教育制度においてインド系移民の子弟と解放奴隷の子弟であるクレオールを分けて学校教育を開始したことが、今日のモーリシャスの複数言語教育の出発点となった。

インド人学校では生徒の母語に応じて、ヒンディー語やタミル語などが教えられた。本稿の始めに、1991年の国勢調査の宗教別人口統計には、クリスチャン・タミル、アーリヤ・サマジスト・ヒンディー、アーリヤ・サマジスト・グジャラーティといった宗教や宗派と言語集団名の組み合わせやマラーティーやボージュプリー、テルグといった言語集団名が見られることを指摘したが、言語アイデンティティーに基づくインド系移民の細分化を考える上でも、モーリシャスの教育制度は無視できない要因である。

第3に、このようなインド系移民の言語や宗教による細分化の背景には、プランテーション労働者内の小集団の形成があったと考えられる。年次報告の記述にあるクラスやバンドあるいは家族、同郷者という言葉に、インド系移民の言語集団や宗教集団あるいは内婚集団への分化を見いだすことができる。こうした小さな移民集団の分化と対立は、契約期間終了後の労働者をプランターがサルダール（徴募人）としてインドに派遣する徴募システムと、このサルダールをチーフとするインド系移民内の諸グループの対立意識を巧みに利用したプランターの労働者管理によって促進されたものと考えられる（Carter, 1995, pp.48-49, p.221）。

第4にインド系移民が定着し、契約労働

者からインド・モーリシャンに移行するにつれて、本来、インド系移民以外の住民の総称にすぎなかったジェネラル・ポピュレーションというカテゴリーもまた、エスニック・グループ化していった。この傾向は、後に中国系移民をシノ・モーリシャンとしてジェネラル・ポピュレーションから排除するようになると、いっそう明確になる。ジェネラル・ポピュレーションは、フランス語やクレオール語という言葉とクリスチャンという宗教によって特徴づけられるモーリシャス人のカテゴリーを表す言葉となったのである。

このように、19世紀の大規模なインド人契約労働者の導入と定着にともなうインド・モーリシャンというエスニック・グループの生成は、中国系移民や先住のフランス系住民、アフリカ系住民のエスニック・グループ化を促した。その意味で、インド・モーリシャンの形成期を検証することは、今日の多文化社会モーリシャスの形成史を読み解くことでもあったのである。

インド・モーリシャンは、普通選挙法の実施以来、モーリシャス政治の軸を担うようになった。いくつかの商人カーストを除くインド・モーリシャンのほとんどは、すでに母国との絆を失って久しい<sup>5)</sup>。しかし近年彼らのあいだで、インド文化への回帰ともいえる動きがみられる。

首都ポート・ルイスのヒンドゥー寺院にはインドから祭司が招聘され、1994年には大規模な改修工事が完成し、それを祝う儀礼も盛大に行われた。ヒンディー語のスピーチコンテストや、インドの詩人や宗教者を招いての講演会も盛んである。政府の後押しにより、インド本国との経済・文化交流も積極的に進められている。インド・モーリシャンは、こうした文化運動のなかで、改めて自分たちのアイデンティティを確認しようとしている。

民族とは、その内実の固有性そのものよ

りも、その固有性の一部に焦点を当てつつ弁別的に区分けされることによってはじめて、他の民族とは異なるものとして成り立つものである（内堀，1997，p.17）。インド・モーリシャンがインド文化への回帰志向を強め、そこに弁別的な固有性を主張してゆくとき、それはジェネラル・ポピュレーションにどのような影響を与え、また国内のナショナリズムの動きとどう反応しあうのだろうか。ここに、多文化社会モーリシャスの新たな局面が創り出されようとしている。

#### 注

- 1) サナタ・ダルマ寺院連盟は、オーソドックスなヒンドゥー教の寺院を統合する組織で、約240の寺院を傘下においている。アーリヤ・サマージは、19世紀のインドにおけるヒンドゥー教改革運動のなかで形成された運動体の一つである。モーリシャスのアーリヤ・サマージは、カーストを基盤にしたグループを含め3グループに分かれている。このような宗教団体は、ヒンドゥー教の祭礼や儀礼を主催するほか、メンバーの福祉・厚生活動、言語教育活動などを行っている。イスラム教の宗教団体も同様である。
- 2) この節の歴史の記述では、歴代総督に関してナーバル（Napal 1884）およびマニック（Manick 1979）ハザレーシン（Hazareesingh 1976）の文献をもって補足する。
- 3) 1760年にフランス軍の捕虜として最初の中国人が島に連行されてきた。その後、1829年にシンガポールとペナンでクーリーが徴募されたが、マラヤ政庁の反対もあり継続的導入には失敗した。1840年以降、政府ではなく個人の徴募による導入が始まった。中国系の住民の多くは町に住み商店を営んでいる。ポート・ルイスには、中国人地区があり、仏教寺院も作られている。
- 4) 1877年1月に、ポート・ルイスでヒンドゥーとムスリムが衝突し警察が介入するという、小規模ではあるが最初の宗教騒乱事件がおきている。
- 5) 例外は、例えばグジャラート系のムスリムの商人コミュニティである。彼らは、現在もインド本国に結婚相手を求め、故地との絆を保持しているほか、環インド洋地域やヨーロッパに広がるグローバルな親族ネットワークを形成している。

## 資 料

British Parliamentary Papers: Mauritius Colonial Reports, Colonial Generals. (M. C. R. と略)

- 1862 (2955), vol.XXXIV. pp.105-129.
- 1863 (3165), vol.XXXIV, pp.94-107.
- 1864 (3304), vol.XL, pp.102-114.
- 1865 (3423), vol.XXXVII, pp.94-129.
- 1866 (3719), vol.XLIX, pp.139-147.
- 1867 (3812), vol.XLVIII, pp.106-153.
- 1867-1868 (3995-II), vol.XLVIII, pp.41-54.
- 1868-1869 (4090-I), vol.XLIII, pp.20-39.
- 1870 (c.151), vol.XLIX, pp.27-59.
- 1871 (c.407), vol.XL. pp.41-77.
- 1872 (c.583), vol.XLIII. pp.58-132.
- 1873 (c.709-I), vol.XLVIII. pp.35-76.
- 1874 (c.882), vol.XLV. pp.192-201.
- 1875 (c.1183), vol.LI. pp.141-152.
- 1876 (c.1336), vol.LI. pp.254-273.
- 1877 (c.1869), vol.LIX. pp.148-167.
- 1878-1879 (c.2273), vol.L. pp.225-276.
- 1880 (c.2598), vol.XLVIII. pp.235-262.
- 1881 (c.2829), vol.LXIV. pp.241-258.
- 1882 (c.3218), vol.XIV. pp.194-202.

## 参 照 文 献

綾部恒雄

- 1985 「エスニシティの概念と定義」『文化人類学』アカデミア出版会. pp.8-19.

Barth, F.

- 1969 "Introduction", in *Ethnic Groups and Boundaries*. Barth, F. (ed.). Little Brown. Boston. pp. 9-38.

Carter, M.

- 1995 "Servants Sirdars and Settlers: Indians in Mauritius, 1834-1874. Oxford University Press.

Government of Mauritius

- 1983 Mauritius Census 1983, vol. 2.

Hazareesingh, K.

- 1976 *History of Indians in Mauritius*. Macmillan Education. Hong Kong.

Mannick, A.R.

- 1979 *Mauritius: The Development of a Plural Society*. the Russell Press. Nottingham.

Mouton, B.

- 1996 *Les Chrétiens de l'Île Maurice*. La Couverture. Port-Louis.

Napal, D.

- 1984 *British Mauritius 1810-1945*. Hart Printing. Port-Louis.

内堀基光

- 1997 「民族の意味論」岩波講座文化人類学第5巻『民族の生成と論理』岩波書店. pp. 1-28.

Varma, M. N.

- 1980 *The Making of Mauritius*. Interprint. Rose-Hill.

*ABSTRACT*

# From Indentured Laborers to Indo-Mauritians :

Indian Immigrants in Mauritius as seen in British Colonial Reports(1862–1882)

Seiko SUGIMOTO

1. Indian Immigrants in Mauritius : An Overview
2. The Arrival and Settlement of Indian Immigrants in Mauritius.
3. The Classification of Population by the Government of Mauritius
  - (1) Immigrants/Foreigners/General Population
  - (2) Indian Creoles
  - (3) The Classification of Population by Religion
4. Indian Issues discussed in British Colonial Reports
  - (1) Cases of Offenses against Labor Laws
  - (2) The Classification of Criminals by Race
  - (3) Murder and Arson
  - (4) Robbery
  - (5) Poisoning and Suicide
5. The Creation of 'Indo-Mauritians' and the Birth of Mauritius as a Multi-cultural Society

Today, overseas Indians are spread all over the world. In some countries, they have grasped important political and economic power. Mauritius is one such country. The purpose of this paper is to consider the initial stages of the creation of the ethnic group 'Indo-Mauritians', by examining British Colonial Reports sent by successive Governors of Mauritius to the British Parliament in the 1860s and 1870s.

We are concerned here with two aspects. One is the categorization of population by government, which officially creates ethnic boundaries. The other is the 'Indian issues' discussed in British Colonial Reports, which illustrate not only the situation of Indian immigrants in those days but also the government policy for dealing with ethnic issues, through which we can glimpse the ethnic image of Indian immigrants among British officials at that time.

From the materials examined in this paper, we can deduce the following four points concerning the creation of the ethnic group 'Indo-Mauritians'.

(1) In British Colonial Reports, in general, the government of Mauritius identified the word 'Indians' with Indian indentured laborers in Mauritius. Using this identification and informed by racial prejudice, government officers justified putting indentured laborers under severe labor conditions. The statistics in crime reports classified by



race also seem to have helped people to discuss social problems as Indian issues. We may say that such official categorizations of Indians and discussions of Indian issues contributed to the birth of 'Indo-Mauritians'.

(2) In the context of educational policy, the government used statistics categorized by religion and language, where the word 'Indians' means Hindus or Muslims whose mother tongues are Indian languages. The government started school education divided by language and religion. This educational policy separated Indian students from the rest of the population and laid the foundation of Mauritius as a multi-cultural society.

(3) We can also trace the origin of the complicated identity of Indo-Mauritians today, which is a mixture of descent, language, and religion, back to the segmentation of Indian immigrants into small groups in plantations. The segmentation of Indian immigrants in plantations was caused by the recruiting system run by Indian foremen known as Sardars, and the way the laborers were controlled by the planters.

(4) Along with the creation of the ethnic group 'Indo-Mauritians', the category of 'general population' also turned to be an ethnic category, characterized by Creole language and by Christianity. The creation of the Indian ethnic group led to the formation of Mauritius as a nation composed of many ethnic groups.